

旭藏書

第六門

二號

歐山米水



Journal from Europe

Journal



區

米水



明治三十三年十二月二十日印刷
 明治三十三年十二月十五日發行
 明治三十四年一月廿日再版發行

正價金壹圓五拾錢

著者兼
發行者

東京市小石川區
戸崎町六十二番地

乙羽生

大橋又太郎

印刷者

東京市京橋區
西紺屋町廿六七番地

石川金太郎

印刷所

東京市京橋區
西紺屋町廿六七番地

株式會社 秀英舍

發兌元

東京市日本橋區
本町三丁目

博文館

大取次

東京市神田區
表神保町
大阪市東區
備後町四丁目

東京盛文館
東京盛文館

高堂二米書
持去六

日東詩使
帶去我陰

高樓明
三石海

三石海
明

已為望之好上老松
金銀葉心一首以
代別詞

夢



序

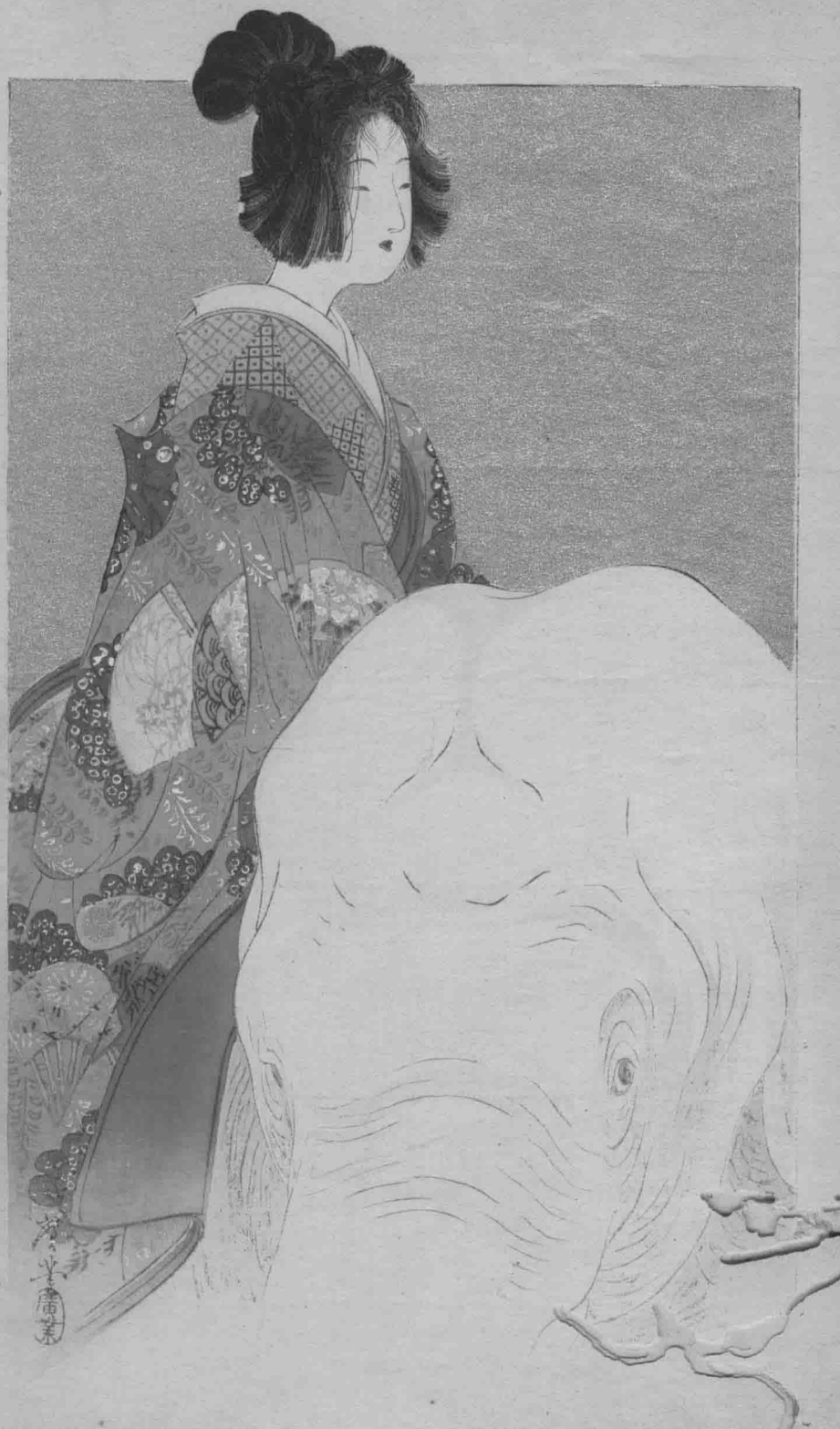
一葦渡江といひしを洒落て、達磨にあしを添へたるは、見ぬ世の畫師が奇智ならずや。こゝに三年啼かず、蜚ばざりし鳥の、弗と思ひ立てることありて、春は花の晨、蝶の翼に露の未だ乾かぬ頃の旭日に翔りて、天外は九萬里、大鵬の跡を追ひ、遠く遙に雲をつらぬきたり。巴里はエツフェルの塔に憩ひて、人間を抜く一千尺、蠢々たる動物の、利にのみ趨る態の醜きを眺めやりつ、かくして米利堅に渡れば、自由銅像の鼻の穴に潜みて、天下の樂園はこゝぞと、われも蒼旻に羽を伸して、かけ搆ひ無き日本晴を愛でたりしが、さすがに古巢の戀しうて、太平洋を一足飛の輕業師、お

高く止つて、下界の人を觀ずれば、噫、社會といふものゝつまらなさよ。山ぢや、水ぢやと境さかいをつくりて、みな銘々の獨自慢。それから見ると鳥の身の氣樂さは、雲に門なく、天に闕無し。人才とやらが無くとも、天水桶の孑孓けつこの、昇天したる例たみしを聞かず。お互様に分を守りて、ハイカラは上見ぬ驚、これは乙鳥つばめの化身かそも、燕尾服の若紳士が、月の前にわが門かどを敲くこと三回さんかいなり。おう、達磨に足あるのが影法師か、鳶とんぼ風の半外套は旦那さんか。應、應、明けて嬉しきは、二十世紀の第一年ばかりかは、此書以て二つの紀念と爲すとぞ。

明治三十四年元旦

著 者 識



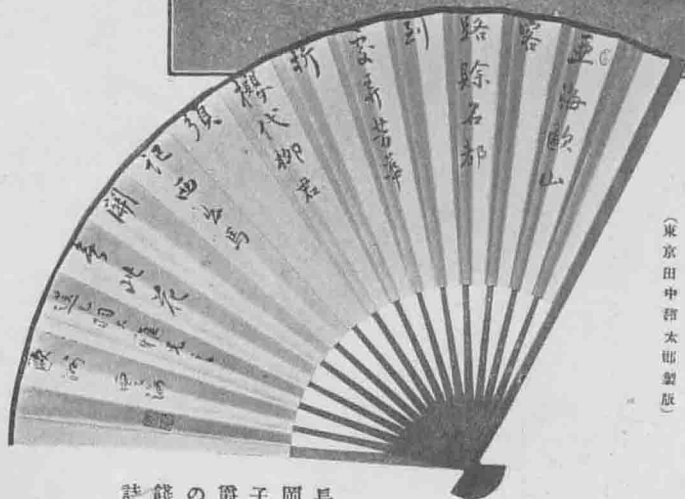




山士富國帝本日大



播州舞子の濱

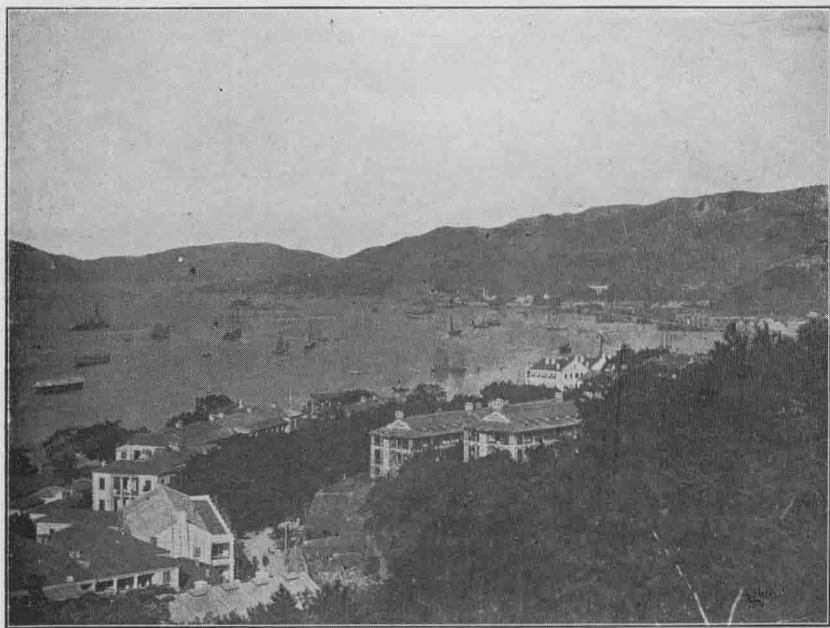


(東京田中源太郎製版)

詩錢の爵子岡長

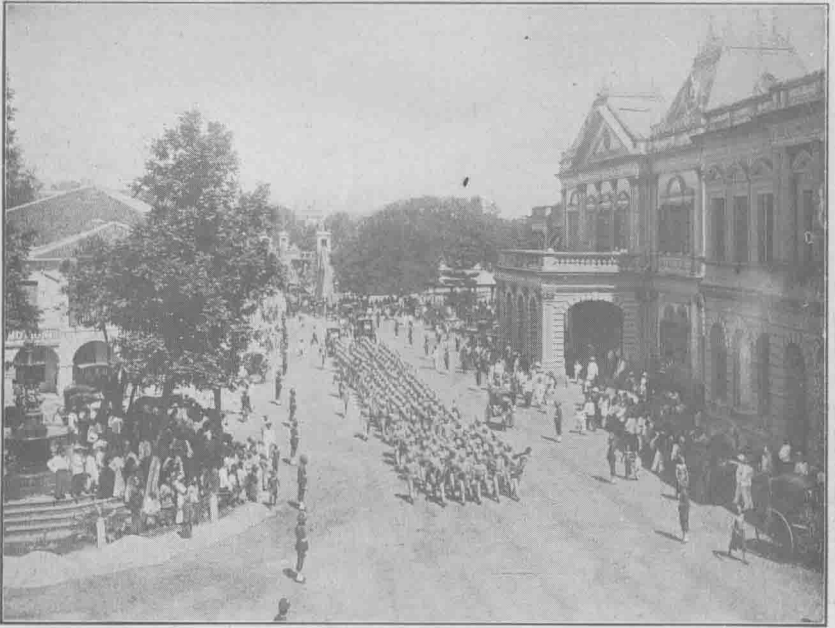
港

香



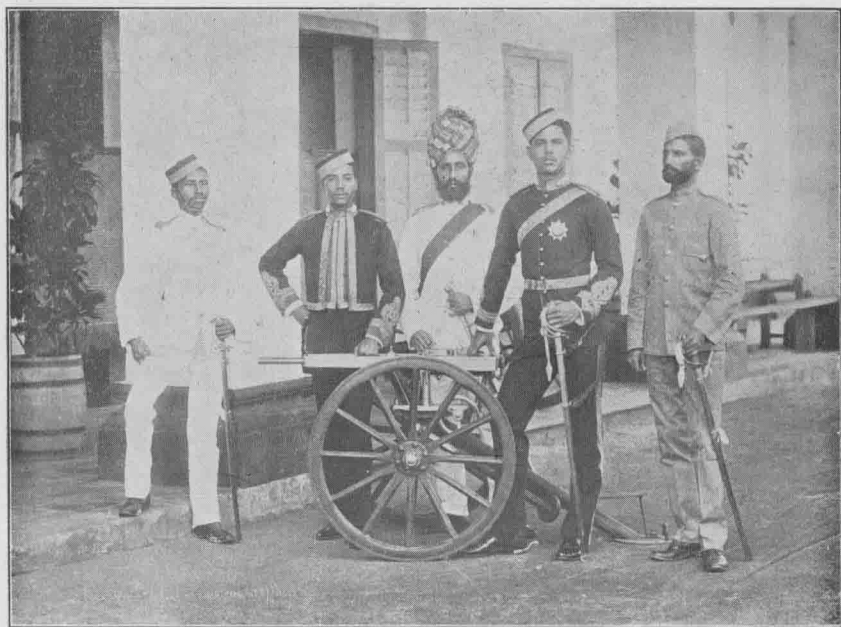
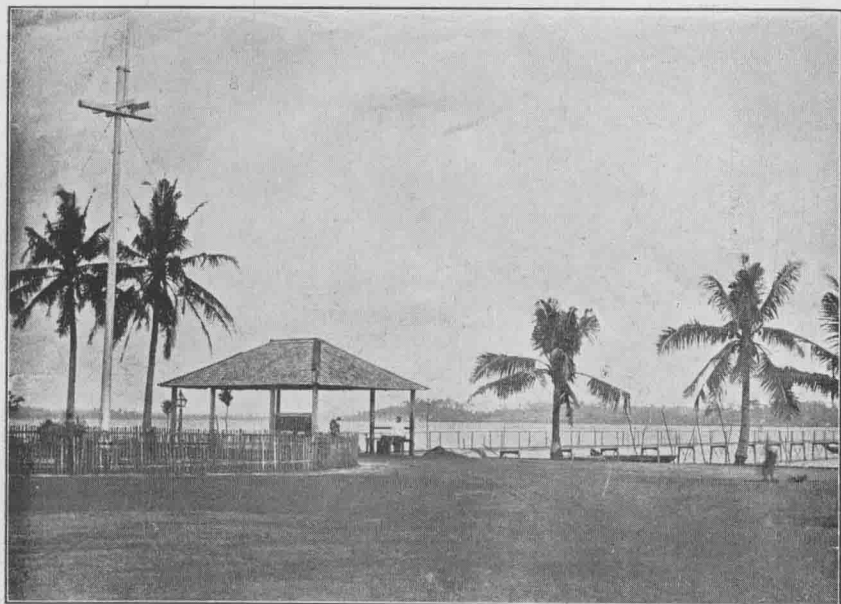
街アリトクイヅ港香

新嘉坡郵局前



新嘉坡植物園

(余哩四十りゝ坡嘉新) 頭渡シンラク

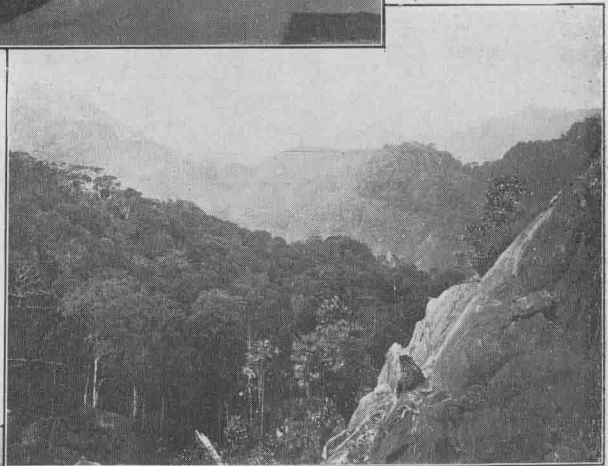


タコマコンツ主領のルホヨジ嶋半來馬

後印度コロムボ波止場



同
シロン嶋山中



同
シロン嶋の象（カンデ途上）



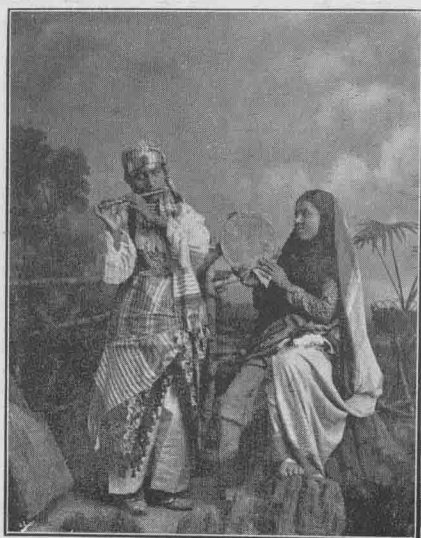
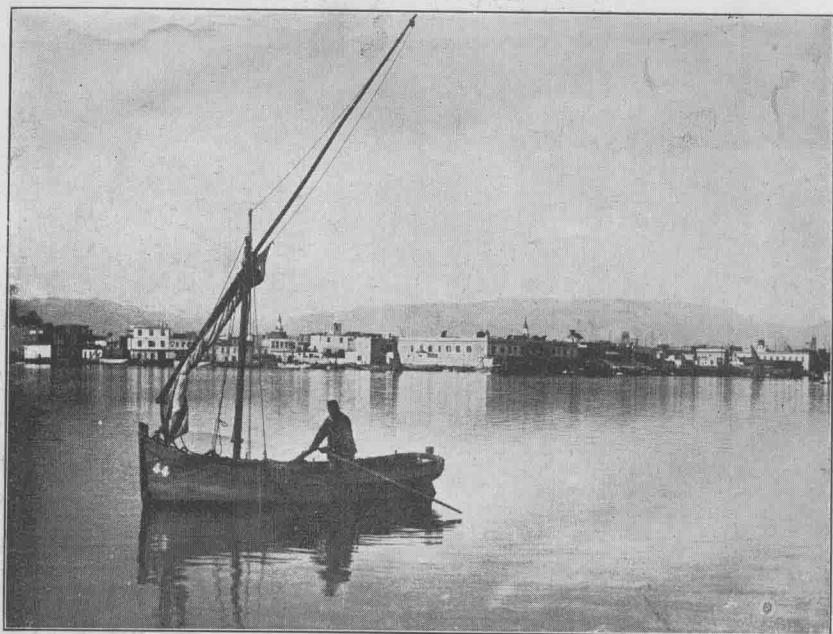
印度カンデー佛牙寺の經藏と骨塔



同寺佛牙開帳（英國皇太子開封）



埃 及 斯 埃 斯 市 街



アビラヤ音楽手



アビラヤ婦人水壺を持つ